

教養としての情報処理

教養学部における情報処理教育の体制は、この数年で大きな変貌を遂げた。すでにこの「センター報告」でも報告がなされているが（No. 44）、ここで簡単に振り返ってみよう。

1993年度から実施されたカリキュラムの改定で、基礎科目の「情報処理」が理科系文科系を問わず必修となった。それまでは理科系でも選択であったから、大胆な改革である。1994年に新しい情報教育棟（これを従来からある情報教育棟と区別するために南棟と呼び、従来のものを北棟と呼ぶ）が完成し、ネットワークで結合されたUNIXワークステーションを約550台のX端末で利用する施設が整い、この年10月の新学期からただちに授業に使われ始めた。1995年の4月からは、教育用計算機センターのシステムが一新され、北棟にほぼ同様の機種構成のワークステーションが端末ベースで約300台入り、さらにパーソナルコンピュータが60台入った。これらもネットワークで結合され、利用者は南棟と北棟のシステムを区別することなく利用できる環境となった。さらに、同年、教育用計算機センターと教養学部の協議の結果、先に導入された南棟のシステムも教育用計算機センターが一体化して管理することとなり、南棟のシステムを構成する機器はすべて、この年の10月に教養学部から教育用計算機センターに移管された。

現在、駒場キャンパスで教育用計算機センターのアカウントを持つ者は約9000人である。情報処理の開講コマ数は、年間35から36である。とにかく量が多い。これだけの利用者があり規模の大きいシステムの管理を引き受けていただいた教育用計算機センターには、ひたすら感謝申し上げるしかない。

ある意味でもっとも遅れているのが、教える側の体制である。現在、「情報処理」の授業の4割を非常勤講師にお願いしている。教育補助員(teaching assistant)も、95年度冬学期からようやく試験的に付けてみているが、不十分である。問題は深刻であるが、これを論じるのは別の機会としよう。

さて、肝心な問題は「情報処理」として何を教えるかである。

駒場における「情報処理」教育の目的の一つが、コンピュータ・リテラシの涵養にあることは衆目の一致するところだろう。しかし、正直なところこの言葉にはどうも居心地の悪さを感じる。まず、カタカナであるのが気に入らない。こういうカタカナ語はとかく意味があいまいである。言葉として熟していないだけに、使う人によって指す内容にかなりの幅がある。それに、リテラシという語は、イリテラシという語を背後に控えさせているように見える。イリテラシは訳せば「文盲」という、ほとんど死語か、もしかする

と禁止用語かもしれないものになるが、リテラシイの方は定訳がなくて、あえていえば「識字」という、文盲とは必ずしも対をなさない表現となる（「Aは文盲である」という文章は文法的に成立するが、「Aは識字である」とは言わない）。イリテラシイが後ろに隠れている構図は、なにやら昨今のパソコンブームで、中年の会社員がパソコン操作を習得しなくてはこの、おかしな心理的圧迫を受けている状況と重なって見える。

そもそも、リテラシイなどという概念が必要なこと自体が問題だという説もある。リテラシイを身につけなければならないということは、裏を返せば、現状のコンピュータを使うために、それだけ障害があることを示すものにほかならない、というわけである。ヒューマン・インターフェース（またまたカタカナ語だ）がさらに向上し、しかも標準化されれば必要のなくなる概念であるというのも、一理あろう。

断っておくが、言葉はともかく、リテラシイ教育が現在の「情報処理」という授業科目の大きな目的であることを、否定するつもりは毛頭ない。むしろ、この部分を充実させるべく、それもクラスによらず同じ内容で、自習にも使えるような教材を提供する努力が、情報処理教育に携わる若手の教官により、現在進められている。しかし、一方で、リテラシイ教育のみが目的であるとも、思っていない。教養学部の教育の一環として、やはり一般教養としての存在理由があるはずである。

いまさら言うまでもないが、中世の人文教育科目（リベラル・アーツ）は、文法、修辞学、論理学、算術、幾何、天文、音楽の7科目であった。D. Knuthは、「計算機科学はこの7つの教養科目の内、少なくとも4つに密接な関係がある」という。どの4つとは明示していないが、文法、論理学、算術、幾何というところであろうか。

リベラル・アーツとは、伝統的な技（アート）が手作業で行うといった物理的な制約の下にあるのに対し、そのような制約から一切自由であるという意味であろう。それは同時に、実用として役に立たなければならないという制約にも縛られないことを含んでいよう。リテラシイという実用の色彩を強く持ちながら、一方で実用性から解放された教養面を強調するには、なかなか難しいバランスを要求される。今のところ、自分の授業でもそれに成功しているとは言い難い。しかし、そもそもリテラシイとは実はリベラル・アーツを習得することであったとすれば、両者を対立的な関係と見るのではなく、相容れるものとする道が見えてくるような気がする。